

注1、多田道太郎著「しぐさの日本文化」 筑摩書房

注2、津守真、本田和子、松井とし共著「人間現象としての保育

研究」I 光生館 (平安女子短期大学)

むすぶ

——そのもどかしさ——

早川満寿子

大勢の子どもたちが、足どりも軽く登園して来ます。その中にたまに一人位、ひものついた靴を履いて来る子どもがいます。きちんとひもが結んであって軽そうなおその運動靴は、脱ぐ時はいいのですが、帰りに履く時が大変です。ひもをほどく、下の布を引っばる。両方のひもをぎゅっと持つ。早くお友だちと帰りたいのになかなか結べない。結んだつもりでも手を離すと左右がばらばらになる。なかなか結べない。「もどかしさ」を教師も共有する。教師の手を借りてやっと結んでもらう。ああよかった。思わずに

こにこする。けれどもこのひも靴は、足元がしまって歩きやすいのです。

我が家の二年生になる息子が、秋の運動会には走りやすいひも靴をどうしても履くといいはり、とうとう買わせました。よし、これで頑張るぞと、当日迄、それを履いて通学しました。玄関で身をかがめて左右のひもをきゅっと引っ張り、いつの間に来る様になったのかきちんと結んでいます。私もこの子が小さかった頃、一足のひも靴を求めたことがありました。しかし、普通の運動靴なら自分で履けるのに、ひも靴の時は親が必ず手を貸さねば駄目で、もうひも靴は買うまいと思ったことでした。でも子どもはその靴を履きたがりました。歩きやすかったのか、それとも履く時に親がちょっと手を触れて履かせてくれるのがうれしかったのか——でも今は、さっさと一人でひもを結んで学校へと飛び出して行ってしまふようになりました。

幼稚園の庭では、まぶしい陽をあびながら先生がまわしてくれる長い縄を、歌に合わせて飛んでいます。「大波小波でぐるりとまわって猫の目」歌の後も一、二、三、四……といつ終るかと思われる程、長く長く飛んでいる子ども。「大波小!!」で縄が足にかかり、終ってしまう子ども。次々と順に飛んではまた列の後につながって、男の子も女の子も今度こそはと順番を待って飛び続

けています。最後迄長く飛び続けようとする子ども自身の決意とは反対に、一つ二つ位で足に縄がかかってうまくとべないもどかしさを、子どもたちは全身で受け止めながらまた次のチャンスをもじっと待っています。

縄を持つ保育者の手にも力がこもります。こちらでは、一人飛びをしているグループがあります。両足でリズムを刻んで飛び続ける子ども、走りながら飛んでいる子ども、「おじょうさん、おはいんなさい」、「ありがとう」と二人で身を寄せ合って飛んでいる子どももいます。S子とY子は、五歳になった年少児です。仲良しだが対立する事もよくあります。縄とびの得意なY子は、「幾つ飛べるか競走しよう」とS子と飛び始める。何回やってもY子の方が長く飛べてしまうのです。Y子は喜々として縄をまわし続け、S子は思う様にならない縄をしっかりと持って、何回もやり直して飛び続けていました。しばらくしてから庭にいるY子とS子を見ると、今後は鉄棒の所で遊んでいます。ここではS子がY子に「あなた逆上り出来る?」「よく出来ないけど」「じゃ、鉄棒の上に座れる?」「出来ない……」身軽にくるりと鉄棒をまわってしまうS子。鉄棒は握っているけど、体が思うように動かないY子。手ばなしで鉄棒に腰掛け、得意そうに足をぶらぶらさせているS子には、縄とびの時に見せたあの悲しそうな横顔は嘘

のようです。友だちの出来る事を見て、「すごいな」と思い、自分もやれたらいいな、いや出来るぞ、やってみよう、と意欲が湧き勇気を出して挑戦してみる。子どもの世界にはこうした動きが小刻みに繰り返され、なかなか達成出来ないもどかしさの中にも、受けたり与えたりし合いながら、一つ一つ身につけていくのだと、しみじみ思うのです。教師というものは、ほんのわずかだけ腰をかがめ、靴のひもを引っぱる事位しかして上げられないようなものだけれども、これから先のいつか、子どもたちはしっかりと自分の手で靴のひもを結べる時が来るように、いろいろなことが身につつき、達成して行くのだということを、強く信じたいのです。

教育とは、教師の側ではなかなか手ごたえを確かめられないもの、結べないもどかしいもののように思います。三月のこの時、保育者として今迄やって来た事は本当にもどかしい事で、絶対的な確かさなど何にも評価する事が出来ませんが、子どもたちと一生懸命共に過して来たことで、いつの日にかきっと子どもたちの中で結ばれるのだという期待を持ち、子どもたちの背に祈りと声援を送りつつ、新しい歩みへと送り出したいと思っているのです。

(翠ヶ丘幼稚園)